えどまえ　うみ　まな　わ
江戸前の海　学びの環づくり
瓦版　第４号

江戸前ESD協議会　〒108-8477　東京都港区港南4-5-7　東京海洋大学海洋科学部

「江戸前の海」に「学びの環」はつくられたのか？
～ドキドキとワクワクの二年間～

河野　博（東京海洋大学・海洋科学部・海洋環境学科・教授）

「江戸前の海　学びの環づくり」（略称：江戸前ESD）に参加してくださったみなさんに、まずはお礼を申し上げます。二年度にわたって東京海洋大学海洋科学部を拠点に行ってきた江戸前ESDでは、おかげさまで、いろいろな成果をあげることができました。平成20年度からは、環境省の促進事業という枠からは独立しますが、引き続きしぶとく展開させようと考えています。

ここでは、ひとつの区切りとして、二つの反省点に注目してみます。江戸前ESDを構成するのはカフェ（知の共有）と耳袋（体験の共有）と寺子屋（理解の共有）ですが、反省点はこれらの構造（関係）と機能（とくにカフェ）についてです。

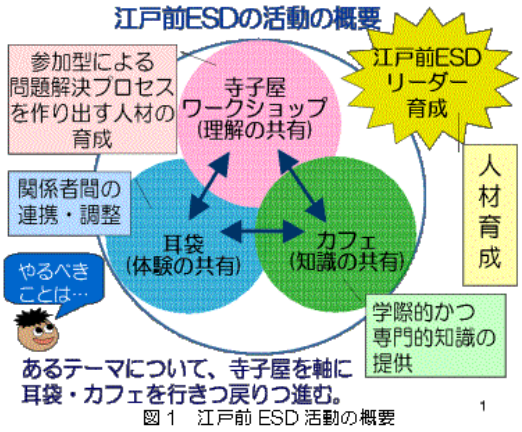
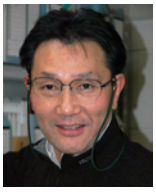


図１　江戸前 ESD 活動の概要

まず構造的には、「三つ巴」ではなく「連結型」の方がより効果的だったと考えています。連結されるのはカフェと耳袋で、中心となるのは寺子屋すなわちワークショップ（WS）です。この間、10回近くのWSを開催しましたが、WSと連結したカフェは1回、耳袋は0回です。江戸前ESDとしてのカフェや耳袋は何回か開催しているのですが・・・。いずれにしても、WSを中心にして、そこでの議論に基づくカフェや耳袋を開催することが効果的です。

もう一つの点は、とくにカフェの機能についてです。カフェの機能は、いろいろな専門家から話題を提供してもらい、環境や生物について深く理解することでした。しかし「江戸前ESDリーダー」を養成するためには、少し違うのではないかと考えています。単に専門家をお呼びして話しを聞くだけではなく、「研究」に参加してもらうことが効果的ではないでしょうか。そのためには、時間だけではなく、私たちが周到なプログラムを用意する必要があります。

平成20年度以降も、事業主体はともかくとして、「江戸前ESD」は継続する予定です。そこでは、ここで述べた反省点を踏まえて、WSを主体とした連結型の構造と周到に準備をしたプログラムを備えて機能アップしたカフェと耳袋を用意して、みなさんのご参加をお待ちしています。私自身、この間、とくに文理融合（＝自然科学 vs 社会科学）については驚きと戸惑いの連続でした。その辺りの雑感については、また稿を改めてご紹介したいと考えています。



河野　博（こうの　ひろし）　愛媛県の海辺生まれ。子供の頃から海づけ・魚づけの日々を送っていたため、魚の研究をするとは魚の研究者になるまで考えたこともなかった。イタリアや東南アジアの魚と親交を深めた後、東京湾の魚と出会う。魚とはいっても専門は仔稚魚（魚の子供）の形態・生態学で、骨の形成過程の観察も好き。最近は東京湾の仔稚魚と戯れている。

江戸前ESD活動報告

第２回江戸前ＥＳＤ協議会が開かれました

江戸前ESD事務局

今年も雪降る江戸前ESD協議会

2月3日、朝から雪が降りしきる日曜日、第2回江戸前ESD協議会が東京海洋大学楽水会館善幸ホールで開催され、江戸前ESD協議会に関わる約20名が参加しました。

はじめに、司会の池田玲子教授（東京海洋大；専門はコミュニケーション学）が、前日開かれた「関東ESD実践者交流会」（NPO法人ESD-J、環境省主催）の報告とこの日の予定を説明し、江戸前ESD代表の河野博教授（東京海洋大；魚類学）が挨拶かたがた、昨年1月からの江戸前ESDの活動について解説しました。

あいさつをする高井学長

そして、高井陸雄・東京海洋大学学長から、江戸前ESDを教育として、地域連携事業としてどう進めるか、2008年度から本学が始める「水圏環境リテラシー教育」との関わり、運動のあり方、大学と地域との話し合いのあり方、それぞれの目的意識など、活動の課題が提起されました（上写真）。

協議会プログラムの前半では、卒業論文研究のなかで江戸前ESDに関わった海洋政策文化学科の学生4名が、それぞれが設定したテーマについて研究の成果を10分程度ずつ発表しました。（発表については、4～11頁をご覧下さい。）

前半終了の休憩時間、国産にこだわって佃煮製造業を営まれる宮島一晃さんが持参下さった、江戸前のアサリ（行徳）や海苔（木更津）、赤貝に似たサルボウガイ、そして最近「白ハマグリ」とその繁殖が話題になっている外来種ホンビノスガイのつくだ煮（右写真）を美味しく試食させていただきました。白いご飯がほしいひと時でした。

第2回江戸前ESD協議会
「今年度の活動をふりかえり、来年度を考える」

日時：　2008年2月3日(日) 13:00-17:00
場所：　東京海洋大学　楽水会館　善幸ホール

プログラム

1．あいさつ　（河野　博　教授）
2．ESDに参加した学生たちの学び
　(1)日野　佑里　（海洋政策文化学科・4年）
　　「大森ふるさとの浜辺公園を利用した環境教育の実施が地域にもたらす効果」
　(2)柳　優香（海洋政策文化学科・4年）
　　「大学と地域の協働のためのワークショップの可能性」
　(3)小林　麻理（海洋政策文化学科・4年）
　　「大森ふるさとの浜辺公園を活用した水圏環境教育の有効性の考察と魚類を用いた教材開発の基礎調査」
　(4)宮崎　佑介（海洋政策文化学科・4年）
　　「魚類図鑑の制作は環境教育に有効か？」
3．ワークショップ
　「港区と海洋大の協働の実現に向けて」
　(1)鈴木晴美さんから情報提供
　　「港区芝で行われている環境教育活動」
　(2)アイス・ブレーキング
　　「こう見えても私･･･なんです！」
　(3)ケース・メソッドによるワークショップ
　　「どうしたらみんな来てくれるの？」
4.ふりかえり

宮島さんが持参下さった佃煮いろいろ。

ワークショップ「港区と海洋大の協働の実現に向けて」

いよいよプログラム後半のワークショップ「港区と海洋大の協働の実現に向けて」です。

まず、長年、港区で東京湾での環境教育活動を実践されている芝の漁業者、鈴木晴美さんから、港区地区青少年委員として、また、母校である三田中学校、芝小学校などの生徒を対象とした、芝浦運河祭での魚類採取やシーカヤック教室、こどもたちを船に乗せての東京湾運河めぐりなどの活動についてお話を聞きました（右写真1段目）。

そして、３つのテーブルに分かれて座り、アイス・ブレーキング「こう見えても私…です」の告白に場が和んだ後、どうすれば江戸前ESDが港区で協働の環を広げることができるのかを考えるため、ケース・メソッド・ワークショップを行いました。

ケース・メソッドとは、実際にあった事件などについて書かれた短編小説のようなケースを参加者が読み、事実を共有しあってから話し合う授業方法（メソッド）、これをワークショップに応用したわけです。この日、用いたケースは、江戸前ESDワーキング・グループが、昨年秋に港区の地域の方々をワークショップにお誘いできなかった失敗談を元に書いたA4紙１ページのお話です。

ケースの説明、課題「1. なぜ人が集まらなかったのか、2. これからどう進めていけばよいのか」の提示の後、それぞれのテーブルで話し合っていただきました。ここで出た意見やアイディアは模造紙にポストイットで書き出し、全員でそれらを分かち合いました。当事者であるワーキング・グループのメンバーは、「説明不足」、「参加の動機付けができていない」などのするどい分析に胸を突かれながらも、「子供と親が一緒に楽しめる体験を」、「プロセスを大事に」などの提案に気持ちを切り替え、次回は、こちらから先方の活動に入れていただくような工夫をしようと話し合いました。

最後に、全員でワークショップをふりかえり、河野教授のあいさつで、今年度の総括忘年度会である江戸前ESD協議会は幕を閉じました。

日曜日の寒い雪の中、ご来学・ご参加いただき、本当にありがとうございました。

港区での環境教育活動について話す鈴木晴美さん

「こう見えても私･･･」告白タイム

ワークショップは熱く楽しく語り合います

最後に全員で意見を分かち合いました。

大森ふるさとの浜辺公園を利用した環境教育の実施が地域にもたらす効果

日野　佑里（東京海洋大学・海洋政策文化学科４年）

1. はじめに－「ふるはま」・「のりかん」は地域活性化の拠点となるのか？

東京都大田区大森は、昭和30年代半ばまで海苔の一大生産地でした。ここに人工海浜公園、「大森ふるさとの浜辺公園」(以後、ふるはま)が開園したのが昨年4月、そして今年4月には、海苔生産に関わられた地域の方々の強い要請によって「大森海苔のふるさと館」(以後、のりかん)が開館する予定です。

近年、博物館ではその機能が多様化し、展示施設としてだけでなく、地域の人々のさまざまな活動の拠点となっている、という報告が国内外に散見されるようになっています。私は、ふるはま・のりかんに同様の可能性を求め、現在、ふるはまで行われている環境教育の状況と課題を明らかにし、ここに江戸前ESD、東京海洋大学が関わることで、ふるはま・のりかんが地域の人々の交流の、さらに、地域環境への意識を高める拠点となる可能性について考察することを卒業論文研究のテーマとしました。

2. 「ふるはま」と「のりかん」ができるまで

ふるはまは、大田区長期基本計画「おおたプラン2015」の「重点計画7、水とみどりのネットワークづくり（潤いのまち）」の取り組み「大森ふるさとの浜辺整備」として、内川河口に、かつての大森の海岸をイメージした親水公園を整備し、身近に憩い集える海辺を創出する目的でつくられた公園です。「大森ふるさとの浜辺公園をつくる会」を中心に住民参加のワークショップを重ねながらつくられたふるはまは、現在、地域の方々に支えられながら、多くの人に利用され親しまれています。ここは近隣住民の通り道でもあり、都内では希少な海辺公園でもあるのです。

ふるはまに隣接するのりかんは、もともとあった大田区の建物を改築してつくられる資料館で、資料展示だけでなく、ふるはまを含む大森の地域特性を生かした体験的活動がプログラムとして計画されています。のりかん設立には、かつて大森の海苔の生産・流通に関わった多くの人々の思いが込められており、海苔を通じて地域の魅力を発見、または見直すきっかけとなる場所となることが期待されています。

3. ふるはまを利用した小学校の環境教育の課題

私が卒業論文研究でおこなったアンケート、インタビュー調査に協力してくださった大森東小学校と中富小学校は、ふるはまの近くにあります。両校とも、海苔についての体験学習をおこなっていましたが、海の環境教育はほとんど実施されていませんでした。でも、ふるはまができたことで、現在は、生き物の観察を中心とした環境教育を行っています。課題もありますが、ここに、海苔生産の歴史を引き継ぐ地域の方々が関わることで、教育の幅の広がりと地域の世代を超えた交流が期待できます(図1)。

4. ふるはまでの江戸前ESDの展開

江戸前ESDでは、地域と協働するふるはま・のり

写真1　ふるはまの横を流れる内川には小さな船がたくさん係留されています。

写真2　小学生を対象とした環境教育活動の様子

かんの活動プログラムをつくるためのワークショップを2007年6月から約半年間、行ってきました。私を含む東京海洋大学の学生もここに参加し、いろいろな意見を出し、また、現地での活動に参加してきました。ワークショップのひとつの成果が、10月2日に大森東小学校でおこなったカフェです（図2）。このプログラムの実施は、対象となった児童にとっても、参加した学生や地域の人々にとっても、それまでの課題の解決を試み、今後の活動へむけて新たな展開への期待が膨らむものとなりました（図3）。

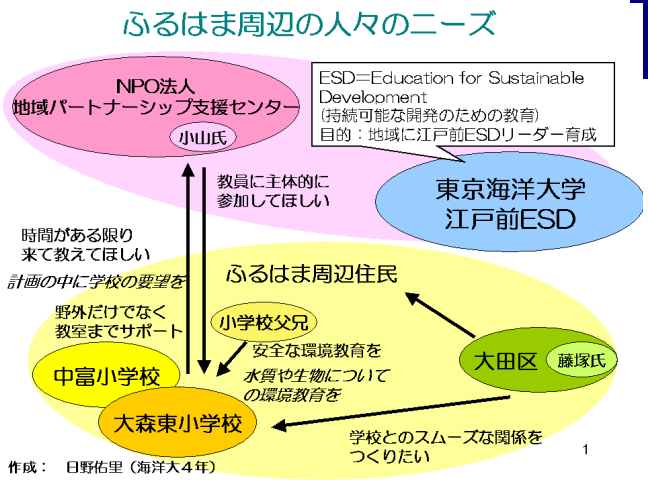
5. おわりに－ESDを一緒にやりませんか？

ワークショップでは、のりかん開館後におこなうプログラム（12頁参照）も計画しました。これからも江戸前ESDはふるはま・のりかんに関わっていく予定です。これまでのふるはまでの教育活動を通して、大森の方々の地域資源や環境に対する認識の高まりが見られました。これからは、地域の方々が主導する環境教育活動の継続と定着が課題となると思います。

現在、小中学校では環境教育の実施が求められ、ただでさえ多忙な先生方はその実践にご苦労されています。

東京湾沿岸地域の学校の先生方、東京海洋大学と一緒に江戸前の海を舞台とした「持続可能な沿岸海洋のための教育」、江戸前ESDのプログラムをやってみませんか？

（ひの・ゆり）



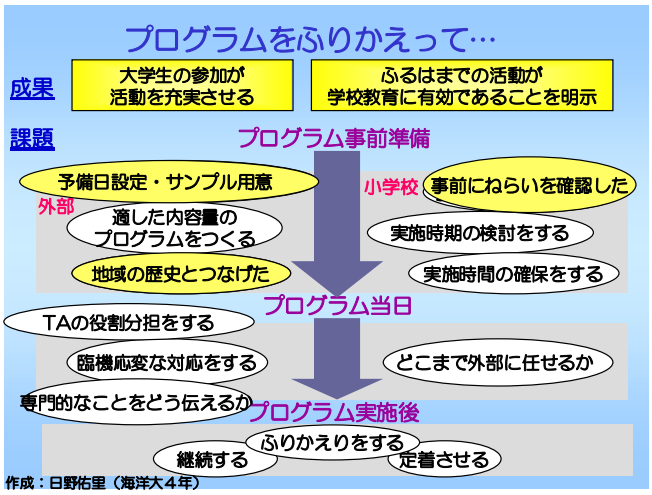


図1(上)　ふるはまでの環境教育に関わる人々のニーズ
図3(下)　江戸前ESDカフェのプログラムをふりかえって

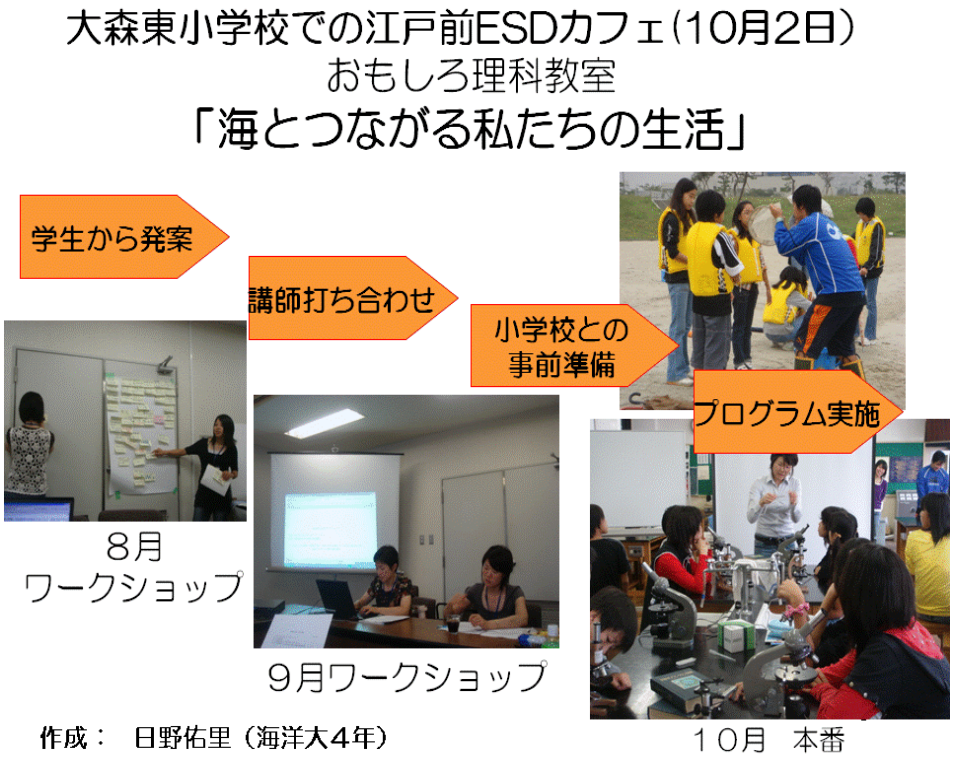


図2　10月2日の江戸前ESDカフェが開催されるまでの過程

主な参考文献

小玉敏也・阿部治(2006)『「持続可能な開発のための教育」に向けた環境教育における「参加型学習」概念の検討』『環境教育』.

上山信一・稲葉郁子(2003)『ミュージアムが都市を再生する　経営と評価の実践』.

高田浩二(2004)「水環境教育に関する博物館の役割と課題」『水環境教育学会誌』.

大学と地域の協働のためのワークショップの可能性

柳　優香（東京海洋大学・海洋政策文化学科４年）

1. はじめに

江戸前ESDでは、「協働」をキーワードとした活動を地域と大学の間で行ってきました。そしてこの協働の具体的な方法の一つとして、数回にわたるワークショップを行ってきました。

ワークショップとは、異なる価値観や背景を持つ人々がそれぞれ対等な関係で参加し、お互いの知識や意見を出し合い、体験を共有し、問題についての合意形成や意思決定を行う参加型学びの場です。参加者全員が参加できるように工夫を凝らしたプログラムのなかで進めるので、主体的な参加が見られる点に特徴があります。また、ワークショップには司会進行や場を促進する、ファシリテーターと呼ばれる人がいることも特徴の一つです。

江戸前ESDにおけるワークショップは、江戸前の海に関わる仕事をされている方、NPOの方、海洋大の教員、学生など多くの参加者によって行われています。なかでも、平成19年11月2日開催のワークショップでは、大田区と海洋大の協働プログラムの完成という成果も生まれています。

私は日本語コミュニケーション論研究室に所属し、「大学と地域の協働のためのワークショップの可能性」というテーマで、卒業研究を行いました。研究の概要を説明します。この研究では、江戸前ESDで行われているワークショップを対象として、２つの研究課題を立てました。

1) 学生ファシリテーターの可能性

2) 多様な参加のプロセスが生み出す創造の可能性

の２つの点を検証するために、次のような手順で研究を進めました。

(1) ワークショップの様子を参与観察し、音声記録・ビデオ記録をする。

(2) 観察ノートの整理、音声記録の文字化を行う。

(3) データの会話分析・相互作用分析を行う。その際、映像データも補助データとして使う。

2. 学生ファシリテーターの可能性

ワークショップにはファシリテーターが重要な役割をします。このファシリテーターは単なる司会者とはちがって、活動中の流れをしっかりつかみ、臨機応変に対応していかなければならない、ただし、存在を強調してはならないなど、その役割の難しさがいわれています。誰もがすぐにできるものではないという認識があります。だからと言って、ワークショップのたびに外部に依頼することになるのは、ワークショップそのものの開催を困難にしてしまい、ESDの目指す「持続可能性」とは矛盾が起きます。そこで、私は、学生でもファシリテーター役を担うことができないのだろうかという疑問をもち、学生によるファシリテーターの可能性を探ることにしました。

2007年6月18日のワークショップは、地域での環境教育を研究テーマとする学生が、自ら仲間の参加者を対象にワークショップを企画し、プログラム作成を行い、さらに自分でファシリテーター役を担ってワークショップを実施してみたものです。

ここでの活動記録を文字化したデータをもとに、ワークショップの様子を参与観察しました。そして、学生ファシリテーター、参加者の役割がどのように進んでいたのかをみてみました。以下はワークショップの流れの一部をあらわした図です。（図１）

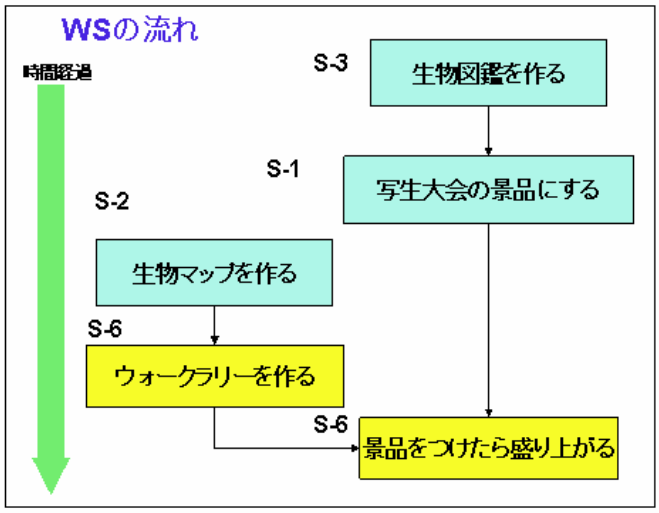


図1　6月18日開催のワークショップの流れ

学生がファシリテーターによるワークショップでは、参加者それぞれから非常に活発なそして具体的な意見が出されていました（写真1）。たとえば、ある学生が一つの意見を出すと、それをもとに他の参加者が新しい意見を次々と出すなど、各自の主体的な参加の様子が分かります。以下に示したもの（表1）は、そのときの発話を文字化したものであり、図1の一部の内容からの抜粋です。

このワークショップ後には、学生ファシリテーターへのインタビューも行いました。このインタビュー内容についても、文字化データにして内容を分析してみました。

その結果、学生ファシリテーターの可能性として挙げられるのは、

1）仲間同士であることの活動参加のしやすさ
2）ファシリテーター自身の学びが同時に可能であること（リード役でありながら参加者となること）

の２点です。学生が協力し合うことによりワークショップは可能であり、学生がファシリテーターを行うことで、今後も大学と地域において協働的なワークショップが期待できます。

3. 多様な参加のプロセスが生み出す創造の可能性

江戸前ESDで行われたワークショップには、学生をはじめ、地域の活動者、大学の研究者など多様な参加がありました。私は、そうした多様な参加者で行われたワークショップをみていくことで、大学と地域の協働の実際をみていくことができると考えました。

表１　6月18日ワークショップの発話から

S-1	うん、なんか、ここに小学校同士の交流ってのがあって、ここにもこう小学生、いろんな小学校でやって、調査やってってのもあって、なんか
S-6	S-2さんのに追加、追加がきたよ
S-6	さっき生物マップは、なんかこう浜の各ポイントを決めて、でそこで生き物をこうスタンバイしてこう待ってて、ウォークラリー形式で回ってもらえば、初めは見やすいかなと
S-1	うん
S-6	勝手に創造しました、でもさっきあったみたいに景品つけると
S-1	うん
S-6	盛り上がる

写真１　６月１８日のワークショップの様子

4. まとめ

江戸前ESDの第1回目から第7回目のワークショップ全体の経過をみていった結果としては、

1）対等な立場での参加の充実
2）継続的なワークショップの発展
3）成果として実際のプログラムの創造

という３点の可能性を見出すことができました。ここから、大学と地域の間に協働が生まれること、大学と地域の協働がワークショップによって実現の可能性があることが分かりました。

5. おわりに

私の研究では、江戸前ESDの活動事例を対象として、多様な立場の人々との協働をワークショップという学びの方法で実現する可能性を見出すことができました。また、学生ファシリテーターならではの利点が見出せ、今後のESD活動においての期待が持てると共に、将来を担う学生が大学と社会を直接つなぐ役割をになっていけるのではないかという期待が持てました。

私自身ワークショップに参加する中で、みんなの手によって新しいものが生まれるという様子を目の当たりにし、協働の底力を感じました。また、はじめての参加のときの不安な気持ちが活動に参加しているうちに、いつのまにか緊張が和らいでいました。これはプログラムの工夫や会場環境などの準備がなされていたからだと思いました。

江戸前ESDに興味や関心のある方は、ぜひ江戸前ESDに参加して、一緒に江戸前の海について考えていきませんか。きっとたくさんの発見があると思います。

（りゅう・ゆうか）

魚類図鑑の制作は環境教育に有効か？
―東京都港区港南におけるケーススタディー

宮崎　佑介（東京海洋大学・海洋政策文化学科４年）

1. はじめに

魚類の生息環境としての京浜運河の流域は10年前より改善され東京湾湾奥部の魚類相をほぼ反映するまでに至り、東京湾湾奥部の魚類を観察するのに適した場所となっている（図1；表1）。また、図鑑の制作が持つ環境教育の効果は期待が持たれているが、未だ検証はされていない。

そこで本研究では、社会的な共通認識を得、また東京都港区港南で魚類図鑑を制作することで人との繋がりが希薄な運河環境との関わりを改善する一歩に繋げることを目標として、魚類図鑑の制作過程および教材としての魚類図鑑が持つ教育的効果を検証した。

2. 材料と方法

小中学生を対象に生物モニタリングと観察会を併せた環境学習会を2007年7月から11月にかけて計4回開催し、そこから得られた発言データおよびスケッチの記載内容の分析を行った。さらに、環境学習会で得られる生物データでは魚類図鑑の制作には不充分であったため（図2）、既往知見と環境学習会のデータを基に、京浜運河の魚類図鑑の制作を行った（図3）。

3. 結果

得られたデータを、道徳的教育に繋がると思われるもののうち特に環境教育上重要と思われる環境倫理と生命倫理に関する内容と、環境教育上重要な自然科学教育に関する内容とを抽出して分類し、これらについて啓発の機会があることを確認した（図4；図5）。また、「魚類図鑑 東京都港区港南 -京浜運河の流域で観察された魚-」を刊行した（図6）。教材として活用できるよう、魚類の解説は読みやすい平易な内容を中心に、専門的

表１　３地点における魚類相の比較

	目数	科数	種数
A: 東京都港区港南	14	35	62
B: 京浜運河流域（東京都側）	15	45	84
C: 東京湾湾奥部	17	56	112
A/C	82.4%	62.5%	55.4%
B/C	89.2%	80.4%	75.0%

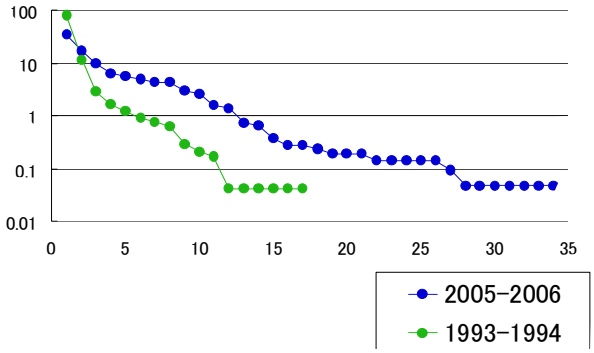


図1　東京海洋大学品川キャンパスにおける係船場の相対優占度曲線の比較（1993年5月～1994年7月と2005年5月～06年7月（宮崎・茂木、2007））

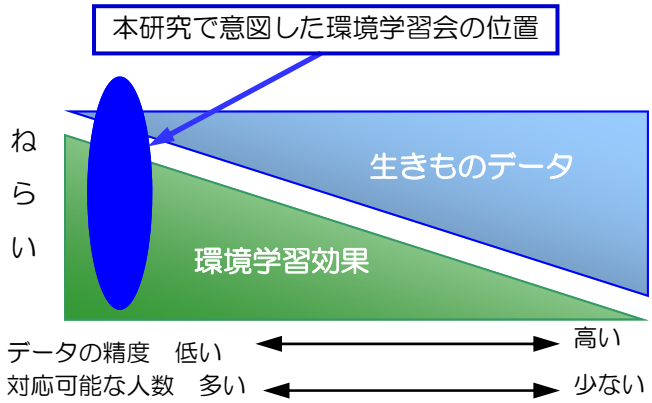


図2　本調査研究における環境学習のねらい

（須田（2007）「市民参加型調査のねらいの設定とその効果の関係」より作成）

な話も示せる形をとった。

4. 考察

環境倫理と生命倫理の二者の対立は、環境保全の際にしばしば問題となる。特に、外来種の駆除という問題が大きく関与するが、環境倫理と生命倫理は別次元の問題であり、同等に扱えるものではなく、どちらも重要であるという認識およびその啓発が重要である。また、そのためには全世界的な目標である生物多様性保全の正しい理解が指導側に必要となる。さらに、豊かな自然観を持つ人の減少および理科離れが叫ばれる昨今では、生物多様性保全を学ぶ上で、市民参加型の生物モニタリングは環境教育の場としても特に活用できるものといえる。

魚類図鑑の制作がまちづくりの原点となり、制作過程そのものが環境教育活動であり、生物多様性保全への啓発を促せるものとして、環境教育に有効であることが示唆された。

5. 終わりに

市民参加型の生物モニタリングやエコシステムマネジメントにおける協働モデルの重要性を再認させられ、図鑑という形でまとめることが活動者のさらなる自信や意欲に繋がると思われる。また、生物図鑑が普段の生活とリンクの切れた身近な環境へ目を向けさせる契機となることから、今後は教材としての生物図鑑の持つ可能性について評価をしていくことが必要である。

（みやざき・ゆうすけ）

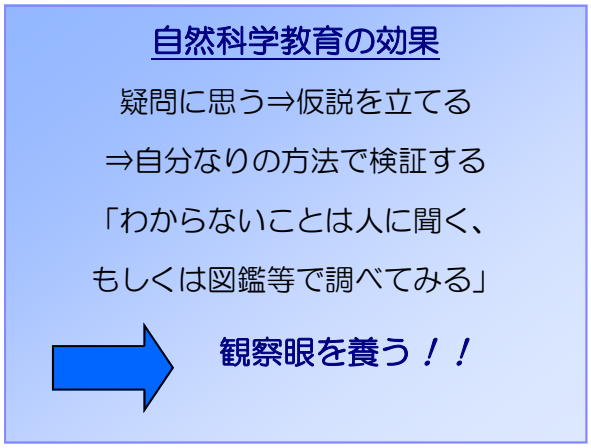


図4　魚類図鑑制作過程で得られた自然科学教育の効果

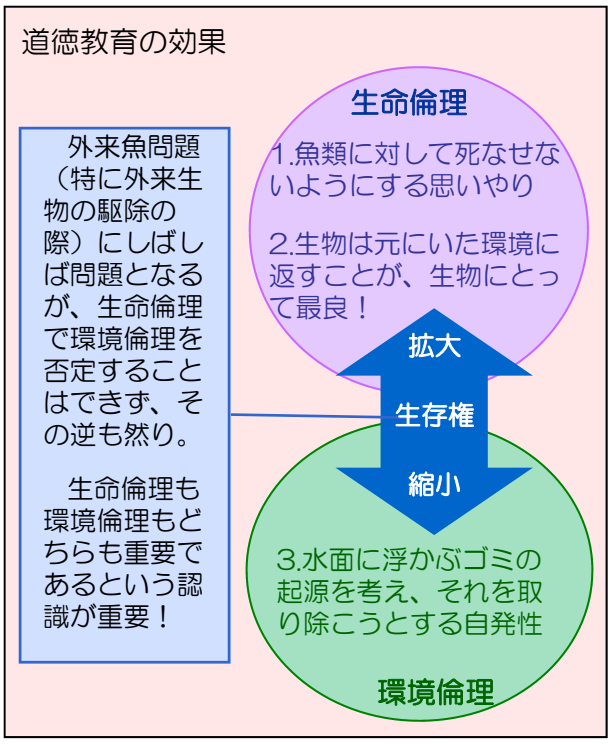


図5　魚類図鑑制作過程で得られた道徳教育の効果

図6　実施した環境学習会の流れ

大森ふるさとの浜辺公園を活用した水圏環境教育の有効性の考察と魚類を用いた教材開発の基礎調査

小林　麻理（東京海洋大学・海洋政策文化学科４年）

1. はじめに

東京都大田区に位置する「大森ふるさとの浜辺公園」（以後、ふるはま）は、人工海浜・人工干潟・人工磯を有する親水スポットとして、平成19年4月に開園されました。この公園の設立により、昭和37年の漁業権の放棄以降、希薄となった、大森の人々と海との接点が回復したのです。私は、卒業論文研究を進めるにあたって、地域の身近な環境・生物を知り、親しみや興味を持つことが、身の回りの環境問題、延いては地球規模の環境問題への意識を高めることに繋がるという仮説を立てました。そして、ふるはまで児童44名を対象に行った水圏環境教育の実践を事例として、アンケート調査結果から、環境意識や学びの広がりを明らかにし、浜辺の水圏環境教育の場としての有効性について考察することにしました。

2. 児童の環境意識と学びの広がりの調査～ふるはまカフェ-海とつながる私たちの生活-を事例に～

10月2日に大森東小学校でおこなった江戸前ESDふるはまカフェは、始めに講師である東京海洋大学の堀本奈穂先生が、東京湾はどのようなところか、大森付近の今昔比べ、湾岸部の埋め立てが進み流域人口が増えたことによる有機汚濁の進行、生き物の変遷、プランクトンとは何かなどについて児童に話をしました。その後、みんなで浜辺に行き、採水をして教室に持ち帰り、水の中にどういう生き物がいるかを顕微鏡で見て、私たちの生活と海とのつながりを学びました（図1）。

私は、このカフェの時に、児童に、普段のふるはまとの関わりや興味、東京湾への関心や知識について尋ねました（図2；アンケート1）。そして、2ヵ月後、再び児童に、誰かにふるはまについて何かを話したか、東京湾を守るために何か考え、実行したかなどを尋ねました（図2；アンケート2）。

1回目のアンケート結果を図3に示します。多くの子供たちがふるはまにまた行きたいと考えていること、生き物、特に魚類に興味があること、東京湾と自分たちの生活との関わりを意識していることがわかります。

その2ヵ月後におこなった2回目のアンケートでは、93%(41/44人)の児童が、 1人平均3人の家族・友達・親戚に活動の話を伝え、23%が東京湾を守るために何かを考えていました。ただし、実行に移した児童は14%と割合が落ちました。

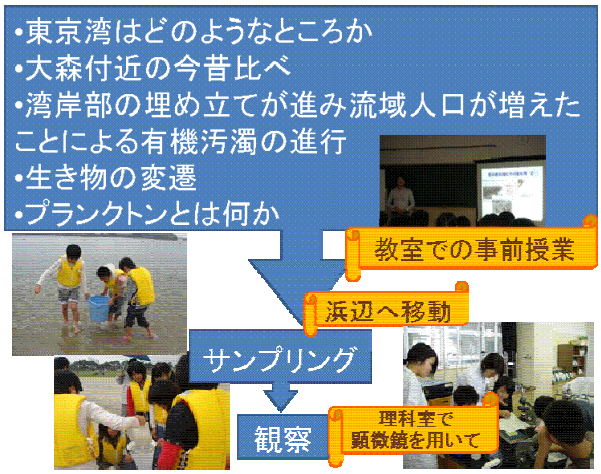


図1　第1回江戸前ESDふるはまカフェの内容

大森東小学校6年生44名を対象に

アンケート1

- 浜辺公園へ行ったことがあるか
- また浜辺公園へ行きたいか
- 次は何をしてみたいか
- 人間生活と東京湾はどのように関わっているか
- 人間生活は東京湾にどのような影響を与えているか
- 東京湾を守るために、普段出来ることは何か

2ヶ月後

アンケート2

- 誰かに話したか
- 何を話したか？
- 東京湾を守るために何か考えたか
- 東京湾を守るために何か実行したか

図2　2回のアンケート調査の概要

これらのことから、ふるはまカフェによって、子供達は自らの生活と身近な環境、そこに生きる生物との関わりについて学び、東京湾の環境を自分の生活に関わる身近な問題であると捉え、家庭や地域社会などにその学びを伝えていることがわかります。したがって、ふるはまは、水圏環境教育の場として有効であると言えます。ただし、芽生えた環境への意欲を行動にうつすためには、また別のアプローチが必要であろうと考えます。

3. 教材開発のための魚類調査(基礎研究)

さらに、魚類を教材にした参加型学習の基礎研究として、大森ふるさとの浜辺公園において魚類調査を実施しました（写真1）。ふるはまの浜辺エリアにて、2007年5月から11月にかけて月1回、計7回投網を用いて行った魚類調査により、ボラ、ウグイ、マハゼなど3目8科19種の魚類が確認されました。

4. まとめ

地域の生物を教材として扱うことで、その生物の存在を知ること、生物の生息環境を観察すること、生物と地域との関係を認識することができます。生物を慈しむ心や地域環境への理解を育むことは、環境問題を考えるきっかけとなるでしょう。

今後、水圏環境教育の場として有効なふるはまー大森ふるさとの浜辺公園において、継続的に魚類調査をおこなって、魚類を用いた生態教材の開発、その教材を用いた参加型学習が実施されることを期待しています。

（こばやし・まり）

宮崎佑介君と小林麻理さんーふるはまにて

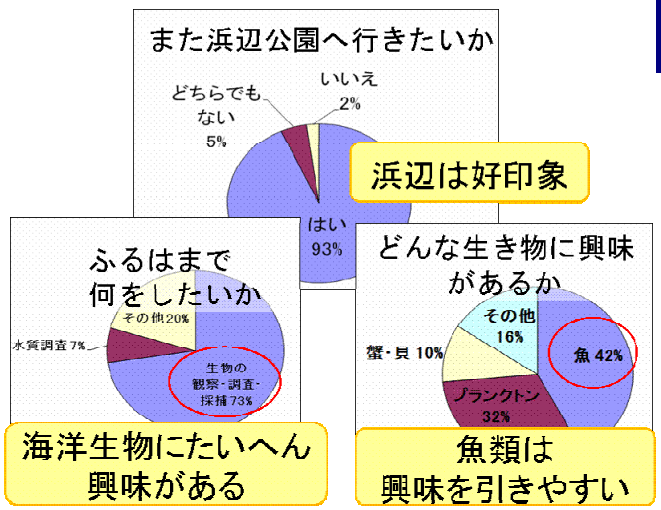


図3　アンケート1の結果

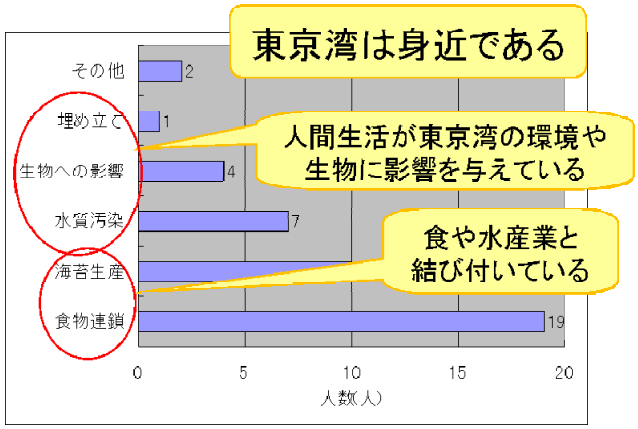


図4　人間と東京湾との関わり

写真1　ふるはまにて、5月から11月にかけて計7回、投網による魚類採集をおこないました。

主な参考文献

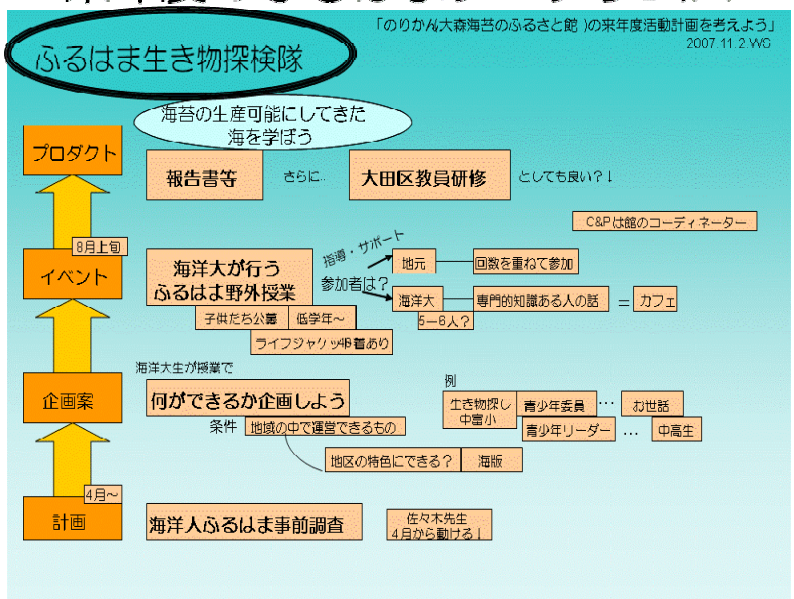
阿部治編(1993). 環境教育シリーズ1・子どもと環境教育. 東海大学出版会.

中坊徹次(1995). 日本産魚類検索ー全種の同定ー. 東海大学出版会.

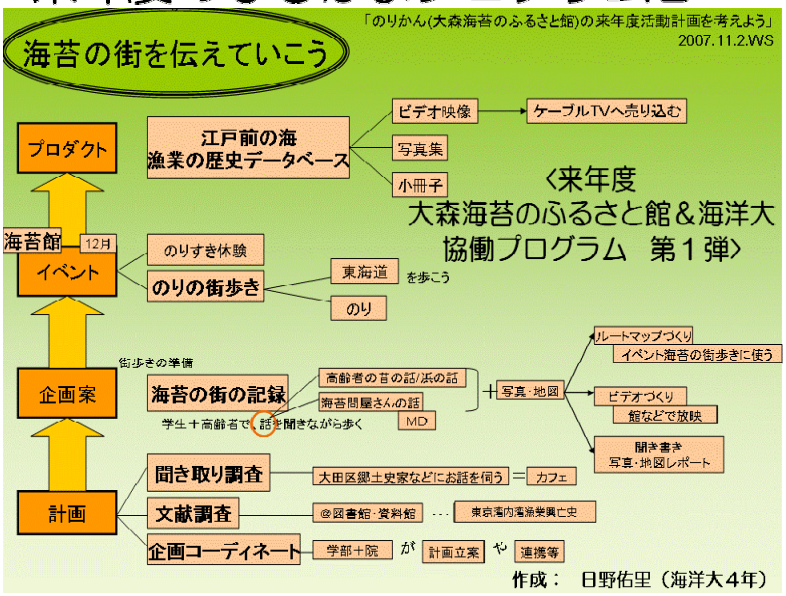
来年度の江戸前ＥＳＤではこんなことをします

江戸前ESD事務局

来年度のふるはまプログラムＡ



来年度のふるはまプログラムＢ



2006年11月に江戸前ESDが始まってから1年半がたちました。この間、東京湾を仕事場とする、あるいは、湾岸地域に長くお住まいの、たくさんの方々にお会いし、お話を伺いました。一人ひとりの東京湾との深い関わり、東京湾や地域の変貌についてのさまざまな思いは、あまりに多く、重く、まだ消化できずにいます。同時に、まだまだ聞き足りないような感もあります。この記憶と思いを同じ場で同じ時代を生きる人たちと共有し、未来へつなげていきたいーというのが江戸前ESDの原動力だと思います。

来年度、江戸前ESDは、のりかんと協働で、左のプログラムＡ・Ｂを実施します。ふたつとも、2007年6月から11月まで、何度もワークショップを重ね、話し合い、共に笑い、時に悩みながら考え出されたものです。

いずれのプログラムでも、一番たいせつなことは、東京湾沿岸で暮らす方々が、東京湾のもたらすさまざまな恵みをずっと受け続けることができるよう、考え、地域で行動していかれることだと思います。私たちはそのサポートをさせていただきたいのです。

ご自分のお住まいの地域で、お仕事場で、勤められる学校で、通われる学校で、子ども会で、こういう活動をやってみたいな、ちょっと面白そうだな、と思われる方、ぜひ、お声をかけてください。江戸前ESDは、「持続可能なESD」をめざして、この活動を続けて行きたいと思っています。

編集後記

江戸前ESD活動の1年半のまとめとして今号が出せて、安堵しています。瓦版もこれでひとくぎり、今までありがとうございました。江戸前ESDで卒業論文研究を熱心に行い、この3月で大学から巣立っていく4人の今後の活躍を期待したいと思います。（川辺　みどり）

発行　江戸前ESD瓦版編集委員会
〒108-8477　東京都港区港南4-5-7
東京海洋大学　海洋科学部
江戸前ESD事務局内
電話/FAX　03-5463-0574（川辺）
電子メール edomae@kaiyodai.ac.jp